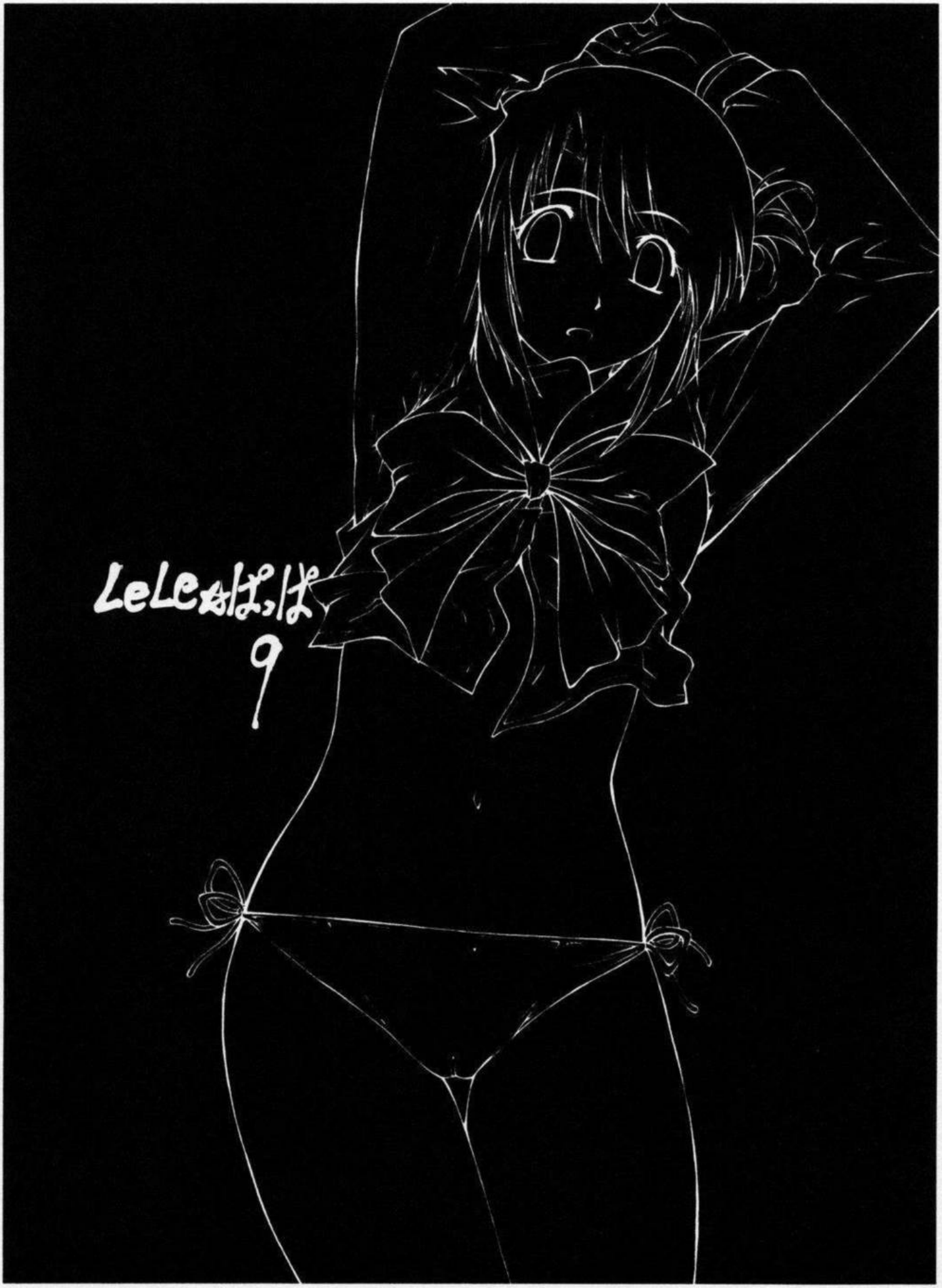
しゃしゃ☆ぱっぱ9

ADULT ONLY


LeLeぱっぱ
9

目次

表紙　イラストレーション　流一本

中扉　イラストレーション　流一本

目次　2

委員ちょ×委員ちょ（こみっく）　流一本　3

しばられるもの（SS）　白朧　15

ベッドの上で（イラスト）　くろうさぎ　22

奥付

私が書庫に拘る理由は
もう一つある…
この一冊の本
すっ…
ゾク

それは…単なる官能小説と言えばその通りだったのだけど…
男性を知らない私には十分すぎる程刺激的で…
じゅん
私の中のもう一人の私が呼び覚まされる…
そんな私の目の前には…
ん…
ぺろ

あっ
ちゅっ
ちゅっ
こんで…いいですか？

す…
お…
おお…
ブル
ブル
あ
あ
あ

はるちゃ
はる
はる
すぅ〜〜
ん
かぷっ♡
ん
すんん
ぺちゃ
ぺちゃ
ぺちゃ

ああ。
ふぇあああ!?
!!
!?
あ…や そこは…

ぶぶぶぶぶ
ぶぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ
くふふふふふふ
ぱく
ぱく
ぱく

んっ
んんっ
んんっ♡
ぺろぺろぺろ
あ…お●んちん♡
はっ…
あぁ♡
はぁ♡
すぁん♡
すぁ♡

あ♡
ちくび♡たってる
ん
しちゃ
しちゃ
んぐ
ぶぐ
ぶぐ
ぶぐ♡
[redacted]
[redacted]

ああああ♥
ブルン
ブルン
ブルン
気持ちいいいっ♥
私は…
他のどんな
逆猥な本を読んでも
こんなにおま●こが
濡れる事はありません
あーっ♥♥
でてるっ
おしりの穴が
射精してる…♥
ビク
ビク
ブボ
ブボ
おま●こも♥
おま●こも
射精させてる…♥
あー♥
いく♥
いく…♥
そしてこの本を
書庫以外の所で
読んでもこんなに
おしりの穴が腸液で
ヌルヌルになる事も
ありません

はぁ
はぁ
もっと…
はぁ
もっとぉ♡
ち●ぽぉ♡
ち●ぽ挿れてぇ♡
ここにだけ存在する
もう一人の私
私は…
ブル
ブル
ブル
この書庫と本に囚われた
淫乱なメスです

はぁ
はぁ
ハァ
ハァ
ハァ
誰か…

小坂さん
いる？
手伝いに来たよ

はい♡
私をここから
解放して下さい…

しばられるもの

著者　白鵬

もう、何度目かのデート。
朝、服を選んでる時に、妹に冷やかされた。
「どーせ、男なんて、身体が目的なんだから、お姉ちゃんが何着てっても一緒だよ……」
我が妹、病院の耳年増は冷め過ぎていた。デートに心ときめかせる、女の子の心理を考えて欲しい。
ちょっと話題の映画を見て、ちょっと評判のランチを食べ、改装したばかりのアミューズメントを覗いていく。
由真にばったり会っちゃったのは、誤算だったけど。
たかあきくんも、由真との勝負に夢中になっちゃって、ちょっとさみしかった。
でも、たかあきくんと一緒に居るだけで、楽しい……。
そう、とっても楽しい時間……。

夕刻。黄昏の刻。
一日中、遊び倒した二人は、ホテル街の近くへと向かう。はしゃいでいた昼間とはうらはらに、序々に口数は少なくなっていく。
「愛佳……」
貴明の呼びかけに、ビクッと怯えた反応を示す。
「やっぱり、イヤか……？」
「え、……ううん、いいの。たかあきくんがしたことしてくれるのが、わたしの望んだことだから……」
「いこうか」
「うん……」
最小限の会話だけで、二人とも繋いだ手を握り締め、ホテルに入っていく。

ホテルの一室に入り、荷物を置いて、昼間遊んだ汗を流すために交互にシャワーを浴びる。
「え、な、なにか、おかしいかなぁ？」
シャワーを浴びて、出てきた愛佳は制服を着ていた。
「なんで、制服？」
「な、なんでって、この方がたかあきくんが喜ぶかなって……、思ったんだけどぉ……」
ラブホテルで制服着ている女の子が居るのは、確かに興奮材料になりえるかもしれないが……。
「駅でコインロッカーから持ってきてたのはソレか……」
「さすがに、持ち歩く訳にはいかなかったから……」
「ま、折角の委員ちょのご好意だ、ありがたく頂きましょう」
「そうそう、人の好意は素直にって……、きゃあ！」
早速、ベッドに押し倒した。
「た、たかあきくん、急すぎ……」
ふと、考え込むようにして、貴明の動作が止まった。
「愛佳……、自分で脱いで……」
脱がされる、と思っていた愛佳は貴明の口から出た言葉に驚いた。
「え、でも……」
「可愛い、愛佳の全てが見たい……」
真っ直ぐに瞳を見返され、愛佳は反論できなってしまった。
「う、……うん」
ベッドから身体を起こして、愛佳は少しだけためらったものの、ゆっくりと制服を脱いでゆく。上着を脱ぎ、スカートを下ろす。可愛らしい肢体に年相応の身体を白を基調とした下着が覆っている。貴明の視線を感じて、慌てて背を向けて、キャミソールをくるくると脱ぎ捨てた。背中に手をまわし、ブラのホックを外す。
慎ましげな乳房のピンク色の頂きの上で、米粒ほどの小さな乳首が尖っている。
ウエストから腰のラインが柔らかな曲線を描いていて、白いパンティは子供っぽいシンプルな形で、ヘアがうっすら透けて見える。その下の二重になった布は、割れ目の形をはっきり浮き出させていた。
「下も……」
「え……？　こ、これも……？　でも……は、恥ずかしいよぉ……」
「じゃあ、ちょっと待ってて……」
「？……」

貴明は、置いてあった荷物の中から、何かを取り出し持ってきた。
「はい、では、賢い愛佳さんに質問です。これは何でしょうか？」
縄だ。荒い麻でなわれたケバだった太い縄。
「な、縄……かな？」
「はい。正解。では委員ちょ。正解者は、手を背中にまわしてください」
「え……？　手を、背中に……？　……こ、こう？」
正直にも背中に手を回してしまう。
「はい、オッケー。後ろ向いて……」
「後ろを……、向く……、たかあきくん……、何をするの？」
またも、正直に後ろを向きながら、疑問を問い掛ける。
「縛る」
貴明の手が、愛佳の手首に縄をかけていき、数秒ののち、手首が背中で×の字に結ばれた。
貴明はあまった縄を前にまわして、乳房の上と下を縛り上げた。愛佳の乳房は、根元をくびられて前に突き出し、大きさを増した。
「可愛い、よく似合うよ、愛佳……」
「でも、こ、こんなのって……。見ないでぇ、お願い、たかあき……くん。見ないでぇ」
目をつぶった愛佳の前で、貴明はベッドに浅く腰を降ろし、膝を開いた。
「舐めて、愛佳……」
貴明の、自分を求める言葉が耳に入る。
「たかあきくん……」
貴明が自分を求めてると思うと、嬉しくなった。恥ずかしさや縄で縛られている事が気にならない。
その場に膝をつき、膝でにじり寄る。
「じゃあ、……する、ね」
貴明がズボンのファスナーを下ろし、ペニスを取り出し突きつける。ペニスは半勃起状態で、先端の鈴割れ部分からは、もう透明な液が浮かんでいる。
首を差し伸べるかのようにして、貴明の股間に顔を埋めた。舌先で亀頭を舐めてから、剛直の部分に舌を這わせるようにしたが、舌に反応したペニスは脈動を繰り返して愛佳を翻弄する。
舌先を這わせていると、男根に力がみなぎってきた。大きくなっていくペニスに、愛佳の視線を釘付けになる。愛佳は瞳を丸く見開いてペニスを見つめた。
「たかあき、くん……。大きくなった……」
「愛佳が……、うまいからな……」
（たかあきくんが、感じてくれてる……）
自分の行為で、男の身体が反応してしることが嬉しかった。
大きく口を開いて咥え、口腔の浅いところで舐めた。先走りの透明な液体が愛佳の唾液に溶け出していく。脳裏が霞みがかったようになっていき、男を悦ばせる行為が、愛佳を陶酔させていく。極上の美酒のように……。
「もっと……奥まで……」
もっと貴明に悦んで貰いという思いが、一生懸命に首を差し伸べる。
喉の奥を開くようにして、茎に沿ってペニスを奥へと入れていく。ペニスの先端が喉の最奥に到達した。
歯を立てないように気をつけて、肉茎の部分を丸めた舌裏で舐めていく。
身体の内側で生まれた熱い塊は、心臓の鼓動に合わせて、全身へと巡っていき、特に乳房と下腹部を熱くさせていく。
ドクンドクン
（あぁ、ど……、どうしようっ！）
蜜が溢れて、ショーツの奥底を濡らした。乳房が興奮してふくらみを増したために、食い込む感じが強くなった。我慢できなくなって股間に踵を当て、疼いてたまらない秘部をそっと刺激する。
喉をふさがれた苦しさと戦いながら、口腔奉仕に集中する。
くちゅくちゅ
舌を鳴らす音が大きく響く。よだれが顎を伝って流れ、縄で根元をくびられた乳房の上に落ちていく。
「そう……、上手いよ」
貴明が愛佳の髪をいじりながら言った。貴明が悦ばせていると思うと愛佳の身体も悦びに満たされていく。
愛佳は無意識に乳房を貴明の足に擦り付けていた。ジーンズのざらついたした表面に乳房が当たり、乳房が形を変えていく。まるで猫が飼い主に擦り寄っているように見える。
（たかあきくんになら、なにされても……いい）
貴明に溺れたい、貴明を悦ばせたいという思いが、身体中に甘く切なく広がっていく。
「愛佳……、も、もう……」
貴明が髪をいじってを後頭部に当てて引き、愛佳の顔にヘアに密着させた。
そして、貴明が限界を越えた。
「ぐっぐっ、うう……？」
愛佳は驚いて目を白黒させた。熱い精液が喉の奥で放出されて、喉の奥から胸の奥まで、精液の味で一杯になる。反射的に口を振ってペニスを離そうとしたが、貴明が顔に股間を密着させた。

愛佳は、縛られ窮屈な姿勢で暴れた。縄でくびられた乳房が煽情的に揺れる。
「ううっ……、うぐぐっ……」
歯を立ててしまわないように唇をすぼめ、舌先でペニスを追いやろうとした。だが、貴明は愛佳の後頭部を押さえたまま、最後の一滴を放出するまで離そうとしなかった。
(く、苦しい……)
貴明が愛佳の髪を掴んで後方に引いたときは、精液の大半を飲みほしていた。
「げほ……、ごほっ……、かはっ……ごほっ」
愛佳は、口の端から精液を零してむせた。拘束された不自由な上半身を震わせながら咳き込んだ。口から溢れた精液が落ちてきて、愛佳の顎、乳房、膝へと流れていく。
「ちゃんと飲んだな。よしよし」
貴明は愛佳の頭を撫でる。小動物の頭を撫でているみたいだったが、褒められた嬉しさが胸に広がる。尻尾があれば、間違いなく振っていただろう。
「立って」
慌てて立ち上がろうとするが、腰が崩れて床に座り込んでしまった。
「あ……」
視界がまわり、バランスが保てない。自分のよだれと、飲みきれなかった精液の零れる床に、上半身を伏せてハァハァ喘ぐ。
×の字で縄に拘束された手首が天井を向いた。愛佳は膝をつき、腰を上げて上半身を倒した状態で、床に頬をつけて目をつぶっていた。縄でくびられた乳房が床と自分の身体で圧迫され形を崩している。尻と太腿が誘っているように突き出されている。
「しばらく、休んで……」
足音で貴明が離れていくのが判ったが、身体がひどくだるい。手首と乳房を縛られた姿勢では、上半身を起こすことは難しい、頬に当たるフローリングの冷たさが気持ち良い。
戻ってきた貴明の手が掛かったと思うと、パンティが引き下ろされた。
パンティに温められていた秘部が、冷えた空気で刺激され、愛佳の脳裏がクリアになった。
「え……」
貴明の手が、愛佳を縛っていた縄を解いていく。
「痛かった?」
「うん……、でも、たかあきくんが……喜んでくれるなら……」
心の中にある自分の本心を吐露した。貴明が喜ぶなら、自分の身体が縛られる事くらいはなんでもなかった。痛みに勝る悦びが全身を満たしてくれるからだ。
「ありがとう、愛佳……、じゃあ、次はコレだ」
愛佳はやっと、貴明の手の中にあるものに気付いた。
「な、なんなの? それ?」
「見てのとおり」
首輪。外側に鋲打ちされた、赤い革の無骨な首輪。首輪の中央の金具からは、五十センチほどの短めの鎖が伸びている。銀色に輝く鎖はパーツ一つ一つが大きく、いかにも重そうだった。
「愛佳にきっと似合うよ……」
逃げたくても、身体の奥がけだるくて、なかなか立ち上がることができない。縄を解かれて自由にはなったが、身体に力が入らない。床に手をつき身体を支えて上半身を起こすにのが精一杯だった。
貴明が愛佳に歩み寄り、髪をかき上げながら首に首輪をまわして金具をはめた。
「やっぱり似合う、可愛いよ愛佳」
愛佳は力が入らない手を、緩慢に差し伸べて首輪を探った。思うように指が動かず、首輪を外すことができない。首輪から下がっている鎖が金属音を鳴らし、慎ましい胸の中央で揺れる。
「た、たかあきくん、これ、重いよぉ……。外して……」
「終われば外してあげるよ」
(ああ……、セックスするんだ。たかあきくんと……、セックス)
愛佳はゴクンと喉を鳴らした。お腹の奥、子宮のあたりがズクンと疼く。貴明のペニスはまた、へそまで反り返るようにそそり立っていた。
「たかあきくんの……、また、大きくなってきてるよ……」
「全裸に首輪を嵌めた愛佳が、すごくエッチ見えるからな……」
褒め言葉とは思えないが、十分過ぎるほどに愛佳には嬉しかった。秘所から蜜が溢れるのが自覚できる。
「あたし……、エッチな女の子なのかなぁ……」
「愛佳は、えっちだよ。そんなえっちな愛佳はとっても可愛いよ」
「やだ、そんなこと言われたら、わたし、もう……」
「もう……、なに?」
膨れ上がった欲望は、身体の中で弾け飛んで、言葉となって喉から出た。
「た……たかあきくんの……、オ、オチン○ンが欲しいのぉ。アソコに入れられて、ぐちゃぐちゃにかき回してぇ。わたしにたかあきくんの精液をいっぱいほしいのぉ」
無意識に口から出た言葉を認識すると、とても自分が言った言葉とは信じら

れなかった。
「やだ、わたし、違うのぉ……、今のは……」
「愛佳は、抱いて欲しいんじゃないの？」
貴明の悟す様な言葉に、ゆっくりと頷いた。
「……うん、わたし、たかあきくんが……、欲しい、欲しいのぉ……。一杯いっぱい抱いて欲しいのぉ……」
貴明も満足げに頷くと、耳元に囁くように命令する。
「四つん這いになって」
「……え？」
「首輪をはめて、犬のように四つん這いになる愛佳はきっと凄く可愛いから、そんな可愛い愛佳を見たい……」
「や、やだよぉ……、そんなふうに言われたらぁ……」
「愛佳……」
「う……ん」
肯定の頷き、愛佳はゆっくりと四つん這いになる。
「散歩してみようか……」
貴明が鎖を引いた。膝と手を交互に動かしてフローリングの床を歩き始めた。
「いやだぁ。わたし、犬みたい……。犬みたいだよぉ……」
アソコとオッパイ剥き出しにして、首から伸びた鎖を貴明に引っ張られて四つん這いで歩いている。ほんとうに犬みたいだった。
「愛佳は、可愛い牝犬だよ……」
そのまま、愛佳には永遠にも近いような時間が流れた。実際には数分だが、四つん這いになって、歩くという未知の行動が無限のような時間を体感させた。肉体的、精神的に追い詰められた愛佳は、あっという間に体力を消耗していく。
「たかあきくん、も、もう……、許して……」
「よく頑張ったね。可愛いよ……」
貴明がねぎらいの言葉をやさしくかけてきた。緊張を強いられた愛佳にはその言葉が引き金になった。
ついに愛佳の我慢が限界を越え、貴明に身体をぶつける。手が思うように動かないのがもどかしい。
「たかあきくん、たかあきくぅん、欲しい……。欲しいのぉ……。ちょうだい、お願い」
悲痛な声で懇願した、その瞳からは涙が溢れていた。貴明に必死にしがみつく。
「何が欲しい？」
「おち……」
恥ずかしさに口ごもったが、それもほんの一瞬だった。
「オ、オチン○ンが、欲しいのぉ……」
悲鳴のような声で言い、両手で顔を覆って泣き出した。
「どこにほしいんだ？」
「アソコに、たかあきくんの、せ、精液をちょうだい！」
貴明の熱い精液を、身体の奥で受け止めたかった。身体からほとばしる様に信号が鳴っていた。
「やっぱり、えっちだな、愛佳は……」
愛佳は両手で顔を覆ってすすり泣いた。
「こっちへおいで……」
擦り寄ってきた愛佳に、貴明は秘所に手を伸ばし、二本の指を使って、濡れそぼった秘所をかき回す。
「はぅん！　はぁ、はぁあん……」
焦らされていたせいで、かなり敏感に反応している。
「こんなに溢れさせて、本当にえっちだ……」
「いやぁ、いやなのぉ……、わたし、エッチじゃないのぉ……」
弱々しく否定するが、身体には全く抵抗がない。
「愛佳、オナニーして見せて……」
耳元に囁くように告げられた言葉に、愛佳は驚愕に目を開いた。愛佳が否定の言葉をつむぐ前に、貴明は畳み掛けるように言葉を継いで行く。
「愛佳がオナニーでいやらしくなるのが見たいんだ……」
耳元で囁かれる、貴明の言葉に頷く。逆らう事など考えも浮かばなかった。
「……うん、たかあきくんが……、見たいなら……」
壁際で、背を持たれかけさせ、お尻を降ろし体育座りをする。膝をそろそろと開いていく、脚はやがてMの字を描いた。
「たかあきくん。い、いやらしい……、ま、愛佳の……、アソコを、どうか見て、見てください！」
自然と、煽情的な言葉が口から滑り出した。
Mの字の中央で愛佳の秘花が息づいている。慎ましく秘所を覆う恥毛、そして、恥丘のすぐ下に、興奮して皮膜を押し開いて秘芽が脈動している。
限界まで脚を広げていることにより、普段は閉じている外唇部が赤く充血してほころび、内側の花弁をあらわにしている。小さな二枚の花びらは、すでに貴明をを迎えるべくに開いており、蜜で濡れた内側の粘膜を剥き出しにしている。
膣口は、つつましやかに閉じていたが、徐々に広がると、白みがかった蜜を吐いた。まさに溢れたという感じだ。

「欲しくて、欲しくてたまらないのぉ。たかあきくん、どうか、わたしに、オチン○ンをください……」
両手を広げた脚の外から持って行き、花弁を左右に引っ張った。膣から蜜がしたたり落ちる。
さすがに恥ずかしくて、貧血を起こしそうになった。顔をそむけ、目を瞑った。涙と蜜が同時に零れた。
「やっぱり、いやらしいな。こんなにびちゃびちゃじゃないか」
「はいぃ！　愛佳は、いやらしい子です。たかあきくんに入れて欲しくて、アソコがびちゃびちゃに濡れてるのぉ！」
貴明が、近くまで寄ってきて、秘所に指を入れる。
「本当に、ぐちゃぐちゃだ」
貴明は、秘所をかき回したあと、愛液で濡れた指を、アナルへと持っていった。
「ひっ、そ、そこは、違うぅ……」
「そう？　欲しいって緩んでるよ？」
貴明は、秘所を弄るのを止めると、カバンから何かを取り出して持ってきた。
「そ、それ、なに……？」
濃いピンク色の物体で、卵を細く伸ばしたような形をしている。
「ローター」
愛佳は、おそるおそる指でつまんだ。思っていたより冷たくなくて、しっとりとした感触で、プラスチックのようにみえるが、柔らかい素材でできていた。
当然、愛佳は器具を使ったプレイなど、したことはなかった。自分の知らないものが体内に入れられるのに恐怖を感じた。
「い、いや、怖い……、怖いのぉ」
首を振って拒む。剥き出しの乳房の上に涙がぽろぽろ落ちる。
「大丈夫だ。安心して愛佳……」
「で、でも、こんなの、こ、怖い、わかんないよぉ……」
「入れてあげるよ」
貴明がMの字に開いた脚の中央に膝をついた。貴明の指を秘部に感じただけで、イッてしまいそうになる。
「息を吐いて」
貴明の言う通りに息を吐く。膣に違和感を感じた。ローターは、あっさりと濡れた膣に埋まっていった。
「ああ……」
愛佳は、膝を開いた状態で身体をねじった。壁に沿って上半身が滑り落ち、仰向けに寝転んだ。姿勢を変えたことによってローターが動いたのか、膣の奥で痛みが走る。鎖がじゃりっと不吉な音を立てた。
「欲しいの……。これじゃ、イヤなの……。たかあきくんのオチン○ンが欲しいのぉ……」
「自分で膝を持って、もっと脚を開いて」
愛佳は膝を乳房につくほどに倒して、手で膝を押さえた。アソコが天井を向いた。
貴明が秘所に指を当てると、蜜がドクッと音を立てて落ち、貴明の指を歓迎した。
「あっあっ、き、気持ちいいっ。たかあきくんのがいいよぉ」
指は一本が二本になり、やがて三本になった。中に収められている。ローターを押し込むように執拗に弄る。愛佳はローターをより深くに感じ、今にも叫びそうになるのを、歯を食いしばって耐える。
「く、苦し、い……」
ローターが最奥にまで到達するともの凄い圧迫を感じる。しかし、貴明の指はローターを突付くようにアソコに出入りを繰り返している。
「た……たかあきくぅん。もう……、もう……、ダメェ！」
軽い絶頂に達し、四肢を痙攣させる。
貴明の指が離れて圧迫感から解放された所で、愛佳はまぶたを薄く開くと、貴明がズボンを下ろしているのが目に入る。
ローターを取りやすいように、四つん這いになろうとして身じろごうとすると、貴明が止めた。
「そのままで……」
愛佳は貴明のの言う通り、両脚を自らの手で開いたまま、ローターを取り除かれ、愛しいペニスを与えられる瞬間を待った。
数秒待っていたが、挿入はされなかった。
「たかあきくん……？」
貴明が何故か動かないので、瞑っていた目を開いて貴明に問い掛ける。
愛佳は、貴明が見ているものに気が付いた。貴明が見ているものは、膣口のさらに下に位置する穴だ。
愛佳は、貴明が何を望んでいるか理解した。
「いいよ……」
「え？」
「たかあきくんなら、何しても、いいよ……」
「愛佳……」
愛佳の意志が伝わったのか、貴明は正常位でのしかかってきた。ソックスを穿いた足元が、貴明の肩に乗った。熱くて硬いペニスが排泄口であるはずの器

官を蹂躙していく。
「あぐっ……、はぁぁぁ……、はぁ……うぅん！」
愛佳は意識的に息を吐いた。早く身体の奥で貴明を感じたかった。アヌスがフワッと広ったと同時に、貴明が一際強く突き入れた。
亀頭の包皮の出っ張りが入ると、後は楽々入っていく。
「あ…あぁぁ……はぁ……は、入ってくるぅ……あぁあっ……、はぁ、う、うれしいぃ……」
膣にローターが入っているから、圧迫感が強い。が、排泄器官まで愛されたことで、貴明に全てを捧げたという思いが圧迫感をかき消していく。
「はぁぁ……お、大きいよぉ……んん……あぁぁ……ひゃぁん」
愛佳は腰をもじつかせ、脂汗の浮いた顔を左右に振った。膣に入ったローターが、圧迫感をますます強くしていく。
「お、大きいよぉ……、つ、つらいの……」
苦痛のあまり、全身の毛穴から汗が吹き出た。
「お、お腹、割れそう……あぁあん……う、うう……あぁん」
貴明が愛佳の顔をじっと見ている。愛佳は霞んだ視界で貴明を見た。身体を繋ぐと、心まで繋いだ気分になる。甘い愛しさが胸に広がる。
「はぁぁ！　た、たかあきくぅん、好き。大好き。たかあきくんのためなら、わたし、なんでもする……」
「お腹ににに力を入れて……」
貴明が指先で下腹部を押さえた。押さえた部分がほんのり熱く、肌越しに異物感を感じる。
「う、ん……うん！」
ぐっと力を入れると、膣の中でローターが移動したのがはっきりとわかった。ローターが入口付近に落ちてくる。貴明が腰を引いたものだから、膣口からローターの先端が覗いた。秘部はぱっくり口を開けてピンクのローターを咥え込み、その下のアナルには貴明のペニスが入っている。
「出てきたよ」
ペニスとローターのほとんどが体外に出た。お腹から圧迫感が消え去り、緊張が柔らかくほどけた。
ズン！
再度、貴明が腰を沈ませた。
「きゃあああっ！」
ローターと男根が前と後ろの穴を同時に埋める。脳髄から全身に快感の電流が走り抜けた。
焦らされ続けた身体と、貴明に捧げた満足感で、感覚はあきれるほど敏感になっていて、たった一度のピストン運動でいきなり絶頂を迎えてしまう。
「はぁぁぁあああ！」
ガクガクと痙攣する。貴明は、愛佳の身体の痙攣が収まるのを待って、再び腰の浮き沈みさせた。
「だ、だめっ。だめぇ、だめなのぉ」
愛佳は瞳を必死の色に染め、手を振り回し、身体を捻ったが、絶頂を迎えた直後のために、その抵抗は緩慢だった。鎖がじゃりじゃりと鳴り、フローリングの床で白い肢体がのたうった。
「や、やめてっ。だめ、だめぇっ！　怖いの。またイクッ。イッちゃうのぉ！」
二度目の絶頂が彼女を襲った。だが、快感は高い位置で留まったまま、さらなる高みを目指そうとしている。
「やめてっ。たかあきくぅんっ、お願いっ」
やっと入れてもらえたペニスだが、燃え上げるのが早すぎて怖い。快感のあまり、狂ってしまいかねない。愛佳は無意識に膣口を締めてローターの移動を止めた。
暴れる愛佳に手こずったのか、貴明が上半身を起こし、手を伸ばしてローターと一緒に持ってきた物を手に取った。
ビィーーーーン！
「きゃあああ。な、なにっ、これぇ……」
全身が破壊されるような衝撃だった。
身体の奥でローターが振動を始めた。膣口を締めて、ローターの移動を押さえていたものだから、振動はダイレクトに脳髄を刺激した。指先まで電流が走る。
「な、……これぇ……。いやっ、動いてるぅ。動いてるのぉ！」
愛佳はろくに力が入らないながらも、全身を暴れさせる。首輪から伸びて、床に模様を描いている鎖が、蛇の様にのたうって金属音を立てる。
「だめぇぇ。イクッ！　イッちゃうのぉ！」
筋肉を硬直させ、口を開き、目を見開いて、未知の刺激に放心する。
見開いたままの瞳から、光が失せていく。刺激が強すぎて、耐えられる限界を越えてしまったのだ。
「おい？　大丈夫か？」
貴明が愛佳の頬を叩いた。失神しかけていた意識が再び浮上する。霞みがかったような視界が段々とクリアになる。貴明が心配顔でこちらを見ている。
「愛佳は、淫乱だなぁ。一分ぐらいスイッチ入れたら、何回イッたんだ？」
貴明がローターのリモコンを目の前で玩ぶ。
「や、やめてぇ、淫乱じゃない……。わたしは淫乱じゃないのぉ……」

振動は止まったとはいえ、下腹は甘く痛く痺れている。その甘い痺れは、アナルのペニスの存在をより明確にさせる。
愛佳は泣いた。唇を歪ませすすり泣く。
「ひどい……ひどい……よぉ……」
すすり泣く愛佳の顔を引き寄せ、貴明がおでこにキスをした。その両手はやさしく、愛佳の肢体を撫で付ける。
「もっと、もっといやらしくになればいいよ。可愛い愛佳……」
貴明が愛佳の目の前まで持ち上げると、リモコンのスイッチを入れた。
「やめてぇ。苦しいのぉ……」
覚悟していたとはいえ、膣の奥で起こる振動は、身体をバラバラにしそうだった。愛佳は目を瞑り、歯を食いしばって耐えた。
「……はぁああ。も、もう、ダメェ！」
「ビリビリする。すごい気持ちイイ。愛佳のアヌス、とっても気持ちイイよ」
愛佳はもう声も出ない。瀕死の魚のように、口をパクパクさせるだけだ。
貴明が愛佳を抱きしめた。身体の奥で液体が飛沫を上げている。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
貴明がスイッチをもう一度押して、ローターの動きを止めてからペニスを引き抜いた。ローターもペニスと同時に膣から頭を覗かせた。
下腹に力を入れると、にゅるりと出てきたローターが、濡れた音を立ててフローリングの床に転がった。
ジワッ
秘部が熱くなった。緊張していた身体から力が抜け、ある行為を始めようとしていた。
「やだぁ、やだよぉ」
排尿を止めようと努力したが、身体がバラバラになってしまったようで、どうすることもできない。
恥ずかしくてたまらないのに、顔を背けることしかできない。
「見ないでぇ、見ないでぇ……、こんなのぉ……」
ジョロジョロジョロ
愛佳はフローリングの床に身体を投げ出したまま、ぐったりと目を瞑っていた。
首輪から伸びた鎖と、緩めた股間から漏れる液体が、床に模様を描いている。
愛佳はその模様の中央で気を失っていた。

「愛佳……」
「ん……」
目蓋を開くと、そこには貴明の顔があった。
「もう、時間が終わるから、出ないと……」
ここがどこか、現状を把握して、突然恥ずかしくなった。
「やだ、わたし……」
失神する前の行為を思い出し、頭に血が昇る。緊縛、ワンワンプレイ、オナニー、アナルセックス、排尿と全ての行為を思い出した。
「やだ、やだぁ、もう、わたし、わたしぃ……」
貴明に背を向け、身体を丸めてすすり泣く。
「愛佳……、可愛かったよ」
「う……っく、すん。た、か……あきくん」
「愛佳のあんな姿は、俺だけのものだ」
そっと、背を丸めた愛佳に、かぶさるように貴明が抱きしめる。
「た、かあき、くん」

もう、涙は止まっていた。

FIN

あとがき代りのスタッフの日常つーか、グチ

白麟　「LeLe☆ぱっぱ9」をお買い上げ頂きありがとうございます。

くろうさぎ　君の期待に応えて委員ちょ本です。
小牧市改め委員ちょシティーの田縣神社の豊年祭こと、ち○こ祭りを流一本と一緒に写真撮影してきたわけだが何か資料になるようなものあったんかいな。

白麟　聖地巡礼してきました。資料なら、ち○こ飴。ほしいか？

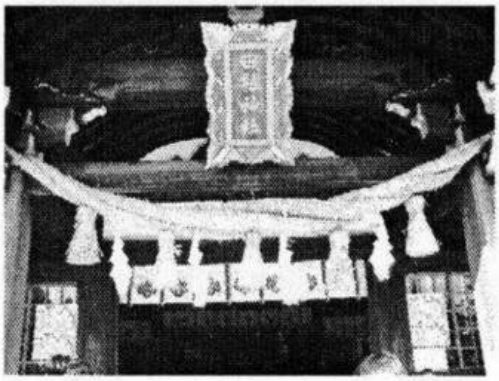
くろうさぎ　そんなもんいらんわ！
大体そんなもん女の子の子宝に対しての縁起物だから男に買ってきてもどうしようもないだろ。

白麟　委員ちょが子宝に恵まれるかもしれんぞ。

くろうさぎ　バチあたりな奴め！

白麟　初詣に行ってくるかな～。

くろうさぎ　気が早すぎだ、このヴォケが！



8月某日　秘密基地にて

奥付

発行　リーフパーティー
発行日　2006/8/13
発行人　くろうさぎ

ホームページアドレス
http://www.ob.aitai.ne.jp/~carmin60/

リーフパーティーの本